

國學院大學学術情報リポジトリ

プロジェクト活動紹介「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001777

「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

プロジェクト責任者 井上順孝

1. プロジェクトの概要

本プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」は、2010年度から3年計画で行うことになっており、本年度がプロジェクト初年度となる。これは2007年度から2009年度にかけて行われた「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトを発展的に引き継ぐものである。

まず旧プロジェクトにおいて2009年に正式に運用が開始された國學院大學デジタル・ミュージアムについて、本プロジェクトでも研究開発推進機構内の諸機関と有機的に連携しながら、システム面における整備・運営を行う。

内容面について、日本文化研究所のものに加えて、研究開発推進機構内の諸機関や学内の学部・大学院における研究成果など、大学の多様な学術資産をデジタル化して発信することによって更なる充実を図る。またそれらを教育など研究以外の方向へと活用していくことも念頭に置く。

加えて本プロジェクト独自のコンテンツを作成し、それを国際的に発信していくことも重要な目的となる。具体的にはEncyclopedia of Shinto（以下EOS）の更なる拡充、日本宗教と神道に関する論文を他言語に翻訳して紹介し、日本と海外の研究者の知識の共有を図る双方向翻訳、またこれまで収集された教派神道関係の資料をデジタル化して公開することなどが計画されている。なお、これらの課題は旧プロジェクトから引き継ぐものであり、2002年度から2006年度

にかけて行われた21世紀COEプログラム『神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成』の後継事業としての性格を持つ。

関連分野への展開に関連して、既に旧プロジェクトにおいて科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（同科研費は2010年度が最終年度となる）と密に連携を行いながら、宗教文化士制度の実現に向けて準備を進めてきており、本プロジェクトもこの事業を推進していく。

これに関して、第一回目の宗教文化士資格試験を2011年度に行うことが予定されており、國學院大學もそこにパイロット校として参加することが決定している。また同制度の運営母体となる「宗教文化教育推進センター」の発足に先立ち、その準備室を2010年度中に日本文化研究所内に設置することが承認されている。

このように、本プロジェクトは旧プロジェクトの成果を受け、それを更に多方面に渡って展開させていくものである。以下ではまず旧プロジェクトである「デジタル・ミュージアムの構築と展開」の2009年度中の成果を簡単に紹介し、その上で2010年度の計画について概要を記すこととする。なお、2010年度のプロジェクトメンバーは以下の通りである。

責任者 井上順孝

分担者

平藤喜久子、星野靖二、塚田穂高（専任教員）、黒崎浩行、ノルマン・ヘイヴンズ、

齊藤こずゑ（兼担教員）、市川収、カール・フレーレ（客員研究員）、市田雅崇、李和珍（PD研究員）、今井信治、マシュー・チョジック（研究補助員）、ケイト・ナカイ（客員教授）、江島尚俊、エリック・シッケタンツ、ヤニス・ガイタニディス、キロス・イグナシオ、小堀馨子、ジャン＝ミシェル・ビュテル、高橋典史、武井順介、松本喜子、ロハニ、ビナヤク（共同研究員）

2. 2009 年度の成果

（1）機構全体に関わる成果

◇國學院大學デジタル・ミュージアム関連

まず、2007 年度より計画を推進してきた國學院大學デジタル・ミュージアムが、2009 年 5 月 15 日に正式に稼働を開始した。正式稼働にあたってシステムのレスポンスなど幾つかの問題が生じたが、これらは実際に稼働させてみなければわからなかった問題であり、適切に対応されて解消している。

公開時のデータベースは次の通りである。

「宮地直一博士写真資料」

「皇學館大学神道研究所所蔵原田敏明毎文社文庫写真資料」

「神道・神社史料 DB（古代神社 DB、現代神社 DB）」

「国学関連人物 DB」

「図書館デジタルライブラリー」

「大場磐雄博士写真資料」

「大場磐雄博士資料」

「柴田常恵写真資料」

「杉山林継博士収蔵資料」

「考古学資料館所蔵縄文土器」

「考古学資料館発掘調査報告書」

「折口信夫博士歌舞伎絵葉書資料」

「Encyclopedia of Shinto」

「Basic Terms of Shinto」

2009 年度において、新システムの運営についてはこれまでと同様に各データベースの実務担当者を中心にワーキンググループを編

成し、適宜協議を行った。内容面では各データベースが個別に充実を図っているが、これに加えて全体に関わる問題として、データベース追加機能を実際に使用した新規データベースの追加と、地図連携機能の実装が行われた。

新規データベースの追加に関して、デジタル・ミュージアムのシステム設計の段階で、データベースの追加を想定した支援システムを組み込んでおり、2009 年前半においてデータの調整を行って実際に追加を試み、9 月 1 日に「祭祀遺物出土遺跡 DB」、「万葉集神事語辞典」、「ホルトム文庫目録」の 3 データベースを正式に稼働させた。このうち「万葉集神事語辞典」は辰巳正明教授が旧日本文化研究所時代に兼担プロジェクトの成果として作成した辞典に画像データを追加して新システム上で公開するものである。「ホルトム文庫目録」は平藤喜久子准教授が科研費による成果の一環として作成した目録情報に書き込み箇所の写真を追加してデータベース化したものである。なお、研究開発推進機構の成果だけでなく学内の学部・大学院における研究成果を新システムに組み込む手続きを協議して定め、これを全学教授会において報告した。

地図連携機能に関しては、以前から 2009 年度に実装するという方向で検討されていたが、デジタル・ミュージアムの正式公開後の安定稼働を確認した上で、6 月頃からあらためて検討を始めた。これは、数値データとして保持されている緯度・経度情報をグーグル・マップの提供する地図上に表示する機能であり、これをどのような形で実装するかについて各データベース担当者から聞き取りを行って要望をまとめ、それらの要望と技術的な問題を富士通の担当者と摺り合わせた。その後数回の打ち合わせを経て、まず 2010 年 2 月 10 日に管理システムに同機能を組み込み、その後 3 月 18 日に公開システムに同機能を実装して、利用者において地図からの検

索や項目からの地図表示ができるようになった。現在「神道・神社史料DB」と「祭祀遺物出土遺跡DB」に地図連携機能が組み込まれており、他のDBがこの機能をどのように活用していくかは2010年度以降の検討課題となる。

なお、デジタル・ミュージアムに関連して、図書館の横断検索システム K-search が正式に稼働したのを受けて、デジタル・ミュージアムも同システムによる横断検索の対象となっている。

◇第3回国際比較神話学会議

国際比較神話学会 (International Association for Comparative Mythology) 主催、科学研究費補助金基盤研究 (A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」と國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所の共催による第3回国際比較神話学会議が2009年5月23日から24日にかけて行われた。

23日の午前には松村一男 (和光大学) による開会挨拶、井上順孝による歓迎の挨拶および科学研究費補助金基盤研究 (A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」の紹介の後、吉田敦彦 (学習院大学名誉教授)、マイケル・ヴィツェル (国際比較神話学会会長、ハーバード大学教授)、千家和比古 (出雲大社権宮司) の3氏による基調講演が行われた。なお、ヴィツェル氏と千家氏による基調講演を下敷きにした論文が年報第2号に収録されている。

また引き続き23日午後と24日に計14名の発表があり、神話学研究的最先端の動向について学び、活発な議論が行われた。

◇国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所と科学研究費補助金基盤研究 (A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステ

ム構築」の主催によって、2009年9月20日に国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」が行われた。

それぞれ5名ずつの発題者とレスポネントは次の通りである。

第一発題者：近藤光博 (日本女子大学)、レスポネント：富澤かな (東京大学)。

第二発題者：中町信孝 (甲南大学)、レスポネント：白杵陽 (日本女子大学)。

第三発題者：ジョリオン・トーマス (米・プリンストン大学)、レスポネント：櫻井義秀 (北海道大学)。

第四発題者：ジャン・ミシェル・ビュテル (仏・国立東洋言語文化大学)、レスポネント：西村明 (鹿児島大学)。

第五発題者：グレゴリー・ワトキンス (米・スタンフォード大学)、レスポネント：山中弘 (筑波大学)。

司会は井上順孝が行った。

5つのセッションにおける発題とコメントを受けた後で総合討議を行い、議論の中で幾つか問題点も指摘されたものの、映画を宗教文化教育に用いていくことの可能性が積極的に論じられた。全体を通して、参加者の共通理解が深められ、映画と宗教という問題について今後とも議論されるべきであることがあらためて確認された。

なお、本フォーラムの内容をまとめた報告書が刊行されている (本号出版物紹介参照)。

◇シンポジウム「宗教文化教育に求められるもの—「宗教文化土」のスタートに向けて」

科学研究費補助金基盤研究 (A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」が主催し、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所が共催するシンポジウム「宗教文化教育に求められるもの—「宗教文化土」のスタートに向けて」が2010年1月24日に行われた。

発題者5名とコメンテーターは次の通りで

ある。木村敏明（東北大学准教授）、澄田新（関西学院高等部教諭）、多田哲（日本ユニシス株式会社 CSR 推進部長）、坪田知広（観光庁観光地域振興課地域競争力強化支援室長）、長井恵美（東京大学文学部学生）。コメンテーター：田中健二（アジア太平洋フォーラム理事長）。司会は井上順孝が行った。

本シンポジウムは、宗教文化士制度をスタートさせるにあたってこの制度がどのようなことを目指し、どのように実施していくかについて、個別具体的な議論を行なうために開かれた。参加者の制度に対する理解が深められただけではなく、教員や学生の立場から、あるいは企業や行政に関わる立場からの発題を受け、積極的な議論が展開された。

（2）プロジェクト独自の成果

◇EOSの拡充

デジタル・ミュージアムの正式稼働を受けて、EOSの新システム上への移行が進められている。かねてより項目本文の英文見直しが行われていたが、2009年12月の段階でそれまでに改訂がなされた項目をとりまとめ、2009年度末に新システムへの登録作業を行った。見直し作業が進められていたのは主に第1・3・4・7・9部であり、これらの新システムへの反映作業は完了している。

付録部分の英訳も開始され、まず年表の英訳が着手された。

関連コンテンツの拡充としては、前年度に引き続き、初学者が画像を通じて神道の基本的な知識を学ぶことを目的とした Images of Shinto: A Beginner's Pictorial Guide の内容の充足が図られた。

さらに、本文の一部は韓国語に翻訳することとなっている。「第4部神社」の翻訳が一応終了し、2010年度からの公開を目指している。

◇双方向翻訳

2009年度は次の4点の翻訳を行った。日本語から英語へ2点、英語から日本語へ2点である。

・日本語から英語へ翻訳された論文

千家和比古「日本神話にみる基層心意―“出雲”の姿相・位相を踏まえて―」（英訳 The Underlying Mentality Seen in Japanese Mythology: Some Considerations in Light of Izumo's Particularities 訳者：松村一男）

長澤壮平「民俗儀礼と日常的な身体経験―岩手県岳神楽を事例として―」（英訳 Bodily Experience in Everyday Life and Folkloric Ritual: The Case of Take-Kagura at Iwate Prefecture 訳者：MATTHEW, S. Mitchell）

・英語から日本語へ翻訳された論文

WITZEL, Michael “Central Asia and Japanese Mythology”（邦訳「中央アジア神話と日本神話」。訳者：松村一男）

ANTONI, Klaus “Izumo as the ‘Other Japan’: Construction vs. Reality”（邦訳「もう一つの日本」としての出雲―虚像と現実―」。訳者：石黒弓美子）

なお、千家氏とWITZEL氏の論文は前述の第3回国際比較神話学会議における発表を下敷きにしたものである。

◇教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化

旧日本文化研究所時代に収集した神理教、神道修成派、黒住教の教団資料について、かねてからデジタル化の作業が進められていたが、デジタル・ミュージアムの正式稼働を受けて、新システム上での公開に向けてデータの整備を行っている。

また神道系新宗教の一つである祖神道の教団資料について、教団から許可を受けて2008年度からデジタル化とデータベース化を進めており、2009年度もこの作業を継続して行った。

◇現代宗教に関する資料・データの収集とそのデジタル化

宗教文化士制度と関連して、主に宗教教育、宗教文化という観点から、現代宗教に関する資料・データを収集している。2009年度はウェブ上の関連情報を収集し、また井上順孝編著『映画で学ぶ現代宗教』弘文堂、2009年5月（新刊紹介参照）と国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」と関連して、宗教文化に関する映画をリストアップした。

◇科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（研究代表者：大正大学教授星野英紀）との連携

科学研究費補助金によるこの研究は、大正大学星野英紀教授を研究代表者として2008年度から3年計画（最終年度：2010年度）で行われており、研究分担者として「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトメンバーの井上順孝、黒崎浩行、平藤喜久子の3名、また連携研究者として同じく星野靖二と学術資料館の加瀬直弥の2名が加わっている。この研究の目的は大学における宗教文化教育の実質化を図ることであり、具体的には宗教文化士制度の実現を目指しているが、本プロジェクトの成果も宗教文化教育に密接に関わるものであるため、連携して事業にあたる。これは2010年度からの新プロジェクトにおいても継続していく。

2009年度の関連する活動としては、2009年5月にハーバード大学が主催した国際比較神話学会議を日本文化研究所と同科研費が共催し、同9月の国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」は日本文化研究所と同科研費が主催した。また2010年1月に行われた同科研費主催のシンポジウム「宗教文化教育に求められるもの―「宗教文化士」のスタートに向けて」を日本文化研究所が共催した。いずれも参加者から高い評価を受けている。

3. 2010年度の研究計画など

◇國學院大學デジタル・ミュージアム関連

國學院大學デジタル・ミュージアムが2009年に正式稼働したことを受けて、2010年度は研究開発推進機構内の諸機関と密接に連携しながら新システムの整備・運営を行い、かつ研究に加えて教育など広く社会に還元することを念頭に置きながらデジタル・ミュージアムの内容の一層の充実を図っていくことになる。このために各データベースの実務担当者を中心にワーキンググループを組織し、情報を共有して新システムの円滑な運営を図る。

内容の充実に関しては、各データベースが個別に作業を進めるのに加えて、新規データベースの追加についても検討する。学内の学部・大学院における研究成果を新システム上で公開する手続きについては昨年度中にこれを定めて全学教授会において報告してあるため、申し出を受けて対応していくことになる。

また、2009年度に実装された地図連携機能をどのように活用していくかについて、ワーキンググループにおいて協議していく。

◇EOSの拡充

まずEOSの新システムへの移行を進める。EOSは現在、当初公開されたバージョンと國學院大學デジタル・ミュージアム上のバージョンが並存しているが新バージョンに一本化すべく、新バージョンの機能と使い勝手を向上させていく。

これと関連して、かねてから表記の統一を含めて項目の本文をより適切な記述に改訂する作業が行われていたが、これを継続すると共に、改訂された本文を新システム上のEOSに反映させる作業を進める。

内容の拡充としては、昨年度に引き続き年表の翻訳を推進し、Images of Shinto: A Beginner's Pictorial Guideの更なる充実を図

る。また EOS の韓国語訳に関しては、2009 年度後半から開始された「第 8 部流派・教団と人物」の翻訳が引き続き進められており、既に翻訳が終了している「第 4 部神社」については 2010 年度中の公開を目指す。

◇双方向翻訳

日本宗教と神道に関係する論文の相互翻訳についても引き続きこれを行い、2010 年度も 4 本ないし 5 本の論文の翻訳を予定している。中心となるのは日本語論文の英語訳と英語論文の日本語訳であるが、韓国語など他言語との間の翻訳も念頭に置いている。また既に 15 本を超える蓄積があるため、これをよりアクセスしやすい形で発信する方法についても検討していく。

◇教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化

旧日本文化研究所時代に収集した神理教、神道修成派、黒住教の教団資料について、引き続き新システム上での公開に向けてデータの整備を行っている。また、これも引き続き神道系新宗教の一つである祖神道の教団資料のデジタル化を行っているが、ある程度まとまった段階で、内容の分析に着手する。

◇学生に対する宗教意識調査（第 10 回）の実施

学生の宗教意識についてのアンケート調査を「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクトと合同で行い、本年度中に報告書としてまとめる。この調査は 1995 年以来、日本文化研究所のプロジェクトと「宗教と社会」学会のプロジェクトが合同で行ってきており、今回が第 10 回となる。質問項目のうち半分程度は初回から通して同じものであり、この 15 年の変化を調べることができる貴重な資料となっている。

◇宗教文化教育の充実のための教材作成

旧プロジェクトは科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（研究代表者：大正大学教授星野英紀）と密接に連携を図っていたが、2010 年度は同科研費の最終年度となるため、これを受けて本プロジェクトが研究成果のとりまとめのシンポジウムの開催、報告書の作成などを行う。

また同科研が目指していた宗教文化士制度について、第一回資格試験が 2011 年に行われる予定となっているが、その運営母体となる「宗教文化教育推進センター」の発足に先立ってその準備室を日本文化研究所内に設置し（2010 年 4 月より 2011 年 3 月まで）、本プロジェクトがこれを支援する。

この宗教文化士制度と関連して、宗教文化教育のための教材作成を念頭に置いて旧プロジェクトでも現代宗教に関する資料やデータの収集とそのデジタル化が進められていたが、本プロジェクトの 2010 年度の計画としては、日本文化、宗教に関する動画教材の作成とその公開に向けて作業を進める。

◇国際研究フォーラム

本プロジェクトは国際的な研究交流の推進を重視している。これは 21 世紀 COE プログラム『神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成』から旧プロジェクトを経て一貫して引き継がれている基本的姿勢であり、毎年最低 1 回は国際研究フォーラムを開催して研究者の国際的ネットワークをより発展させることを目指している。

2010 年度は、宗教文化士制度の開始を念頭に置きながら、「イスラームと向かい合う日本社会」をテーマとして 10 月 3 日に開催予定である。予定されている発題者 5 名とコメンテーターは次の通り。三木英（大阪国際大学）、Isam Hamza（エジプト、カイロ大学）、Salih Yucel（オーストラリア、モナッシュ

大学)、Gritt Klinkhammer (ドイツ、ブレーメン大学)、中西俊裕 (日本経済新聞社)、コメンテーター：師岡カリーマ・エルサムニー (慶應大学、獨協大学、アナウンサー)。司会は井上順孝が務める。

また前日の10月2日に、講師に小杉泰・

京都大学大学院教授を招いて「現代イスラームと日本社会」というテーマで公開学術講演が行われる。主催は研究開発推進機構であるが、本国際研究フォーラムと連動するものである。